初期の慶派について（二）

久納慶一

四　南都復旧の経過と慶派の活動

(二)　興福寺について

前述した様に東大寺では着々と大仏の修営が進められている間に、興福寺の復興は多くの曲折をたどっていることは注目に価する。無論東大寺の造営は官営であり、大勧進重源上人の活躍、あるいは頼朝、秀平などの寄進も少くなく、言わば国を挙げての造営であったのであるが、興福寺は如何にその権勢を誇っても、所詮は藤氏一門の私寺に過ぎぬものであるから、その間の事情は又全く違ったものがある。興福寺の再興造営は、かの大火のあと半年後の治承五年六月十二日には金堂以下を公家の沙汰で、講堂、南円堂は氏長者が、食堂は寺家側が造営する案が出ていることが玉葉に見られ、又東金堂の造営も寺家側の負担で行われており（玉葉　元暦二年六月廿八日）恐らく西金堂もこれと同様に寺家の沙汰によって造営することに定められたのであろう。

興福寺ではとに角十月十六日の鎌足の忌日に毎年修される維摩会だけは何としても寺内で修さねばならぬ関係もあって、まづ講堂の造営を急いだのであるが、この堂の造営に公家側は大極殿用の材木を流用して、これに充てようと苦肉の計を立てたが、このことは公私混同も甚だしいと問題にされて計画は中止され、遂に講堂は年内には出来ないこととなる。（玉葉　治承五年八月廿日）、そこでこの講堂の代りに食堂の造営を急いで、九月十三日ごろは近く落成する段階に迄漕ぎつけた様で、十月十六日の維摩会には未だ完成していない食堂で、新造の阿弥陀像を中心に禅定院から浄名、文殊菩薩、四天王像を、往生院から観音、勢至両菩薩像を渡して、とに角形だけは一応揃えて維摩会を修したのであった。翌年の維摩会にはこの阿弥陀像の脇侍か何かに新造の像が加えられたらしく、玉葉の寿永元年十月一日の条には「今日奉渡二興福寺講堂仏於南京一」とあり、更に四年後の文治二年（一一八六）十月九日になって、院尊作の講堂二菩薩像を京都から送るとともに、講堂の造営もようやくこの頃完成を見たものらしく、九軀の像を食堂から講堂に移している。

この様に公家側が費用をもつ堂仏の再興が仲々進んでいない間に、寺側で造営する西金堂が元暦元年（一一八四）十二月ごろには完成を見たらしく、流記には「十二月廿二日十一面観音奉移西金堂」と記してある。同様に東金堂の造営も翌年の元暦二年（一一八五）六月ごろ迄には完成していて、玉葉の同月廿八日の条には兼実の許に興福寺所司が牒状を持参して、東金堂は寺家の経営で造り了えたが、造仏にはその力及び難いので、氏公家、受領等を勧進してその費用を集めようとしているのが知られる。この東金堂仏については、鎌倉に下向している成朝のことが関係して来るが、恐らくこの東金堂の造仏については、前々から成朝に受持たせる様な話になっていたのであろうが、この勧進からも推察される様に経済的に苦しい状態にあった寺家では、結局はこの造仏を公家側で負担する様に働きかけたのではなかろうか。このことは文治二年八月三日の玉葉には東金堂仏を八月九日より法成寺中薬師堂を仏所として始める話が出ており、それからすると成朝に代って院性が造仏にあたる事情などもほぼ理解出来る。ところがこの公家側での造仏も一向に進まなかったことらしく、翌文治三年（一一八七）三月九日には東金堂衆が大挙して、当時仁和寺宮領であった山田寺から、金銅の薬師三尊像を奪取して堂に安置して了うが、これは恐らく一向に捗らぬ公家の沙汰に業をにやした挙句のことであろう。この年の七月十三日にはようやく南大門の棟上げが行われ、年末には南門堂の仏像の御衣木のことが話題とされる様になる。（玉葉　文治三年十二月廿五日）そうして翌文治四年正月廿九日には金堂、南円堂の棟上げが行われ、ここに興福寺の造営はにわかに活気づくかに見えたのであるが、二月十九日には、藤原の一門　内大臣良通が急逝すると云う兼実一家の大事が起り、造寺の沙汰もここで又延引を来すが、やっと六月十八日に最勝金剛院で南円堂の不空羂索観音、四天王、法相六祖像などが康慶を大仏師として始められている。この南円堂の造仏がその後如何なる経過をたどって完成されたかは、明かではないが、（殊にその四天王像については疑問がある）毎年九月三十日から長岡右大臣すなわち藤原内麻呂の忌日にあたる十月六日にかけて南円堂で修される法華会に問に合う様に予定されていたのであるが、兼実が病気をすることか、上西門院の崩御など色々の故障があって、予定より一年おくれた文治五年八月廿七日に開眼され、廿八日に堂に渡してその年の法華会に間に合わされたのである。

この間に康慶らの南円堂仏の仏所は京都の最勝金剛院から興福寺一乗院へと移されているが、それは恐らく、元暦二年七月九日の大地震にかなりいたんだ最勝金剛院の堂の修理がこの頃行われた様で、一乗院の完成に伴って文治四年の末から、文治五年二月ごろにかけて、同院内良隅に仏所が設けられ、これへ移ったからであろう。運慶も康慶のもとでこの仏像を製作したものと考えられる。何故ならばこの文治五年の三月廿日から興福寺内で運慶が大仏師となって浄楽寺の像を始めた旨の造像銘札が先年発見されており、その銘札によると「大仏師興福寺内相応院勾当運慶小仏師十人」とあって、この「興福寺内」の文字は彼も恐らくこの一乗院内の仏所にあって、南円堂の造仏のかたわら、この浄楽寺像を製作したものと解釈される。

またこの頃西金堂の本尊の造立も、苦しい寺の経済のもとで、行わ

円成寺大日如来像 安元二年（1176）

興福寺釈迦仏頭（興福寺西金堂）

れていた様で、文治五年八月廿二日に兼実が造寺の検知を行った際には、西金堂に金箔を押さない白木仏のままでこれが安置されていたことが玉葉に記されていて、兼実に「寺家の沙汰緩々歟」と欺かせているが、この現在頭部と両腕を残している西金堂釈迦如来像も、この間興福寺内に仏所を置いた慶派の手になるものと見て良いだろう。興福寺濫觴記は、この像を運慶の作と伝えているが、その若々しいひきしまった顔容の彫り方、特に眉の線の隆起、唇、顎のひきしまった線は康慶作の南円堂の不空羂索観音にも見られない新しい要素を含んでおり、一方では額の上の螺髪の生え際の線が直線状ではなく額の中央で一旦下ると言う謂る鶏相面の変化を見せていることは注目すべき特徴である。この螺髪の生え際の線のこうした変化は、従前の像には例がなく、文治二年ごろとも考えられる伊豆の願成就院の阿弥陀像にわずかに先例が見られ、又、文治五年の勾当運慶の銘札の出たと伝えられる浄楽寺の毘沙門天の像にも、その例が見られるところからすれば、これはたしかに慶派の生み出した独自のスタイルであり、然もこの西金堂の仏頭は北円堂の弥勒像と、円成寺の大日如来像との中間的な形式で、きびしい作風を示しており、また西金堂の他の仏像を建仁年間にこれも運慶の徒と思われる定慶が造立している処からすれば、この仏頭の作者をこの頃漸く大仏師となった運慶に考えることは極めて可能性の多いことである。

尚この螺髪の生え際の線が鶏相をなすことについては、文治五年閏四月二日に勧修寺で書写されたとの奥書を有する覚禅抄の仏部智光曼荼羅図には、本尊の額の線がこれと同じ形式で描かれている様であ

り、又応徳三年（一〇八六）四月七日の銘を持つ金剛峯寺蔵の仏涅槃図中には、釈迦、文殊などの額の形がこれと同様である。

（注）この鶏相面はガンダーラに屢々その例が見られる。興福寺西金堂本尊は忠実にその系をひくものと考えられよう。

この文治五年と云う年の九月十五日には、前述した快慶が、両親と先師権僧正及び自らの後生のために、三尺の弥勒菩薩像を造立している。この像は快慶の署名の認められる二十五躰の仏像の中では、最も早い作であり、未だ快慶独自の作風を充分にあらわしていない作品である。この像の胎内に経巻を納入したのは、翌文治六年三月八日ごろのことと思われる。

それ以後の慶派の事蹟については、建久二年（一一九一）九月に興福寺南大門の力士像を康慶に担当させようとの話が出たことが玉葉に見られ、また建久三年八月五日から快慶が醍醐僧正の勝憲の発願による三宝院本尊、弥勒菩薩像を造り始め、その年の十一月二日に供養が行われたことが、この像の膝裏に記されている。翌建久四年三月九日には蓮華王院内に先年崩御された後白河法皇のため一堂を建立、供養が行われているが、その堂内に院尊作の丈六阿弥陀三尊と、康慶作の丈六不動三尊とを安置している。またこのころのことと思われるが、光明峯寺金堂の仏像を康慶が等身の大日如来像と三尺の愛染明王像を受持ち、三尺不動明王像一体を仏師雲慶が作っていることが伝えられている。

この後建久五年九月には、興福寺の金堂本尊（明円作）の開眼が行われ、一応興福寺の再興はここになったのである。然し東金堂、西金堂その他の諸堂の仏像は、この後も多くの人々の寄進をまっては一体一体とかなり長い期間にわたって造立されている。

一方この興福寺の供養を宛かも待ちうけていたかの様に、この建久五年の十二月廿六日からは、東大寺で、快慶、定覚の二人を大仏師として、二丈三尺の南中門の多聞、持国の二天像が始められている。これは約二ヶ月半のちの建久六年三月十二日の東大寺供養の日には完成されこいたらしいから驚くべき短時日のうちに完成されたものと言えよう。

慶派の初期として、我々はこの建久五年九月の興福寺供養の日を以て区切ることが妥当であると考える。この後の東大寺での造仏はその経過と言い、又造量と言い、又願主として武士が加わって来ることなどの諸点を考えて見ても、かなりの変化を見せて来る。

運慶はこの後、（建久六年）大仏師としての確固たる地位を保証するかの如き、直彼法眼の栄に浴したのである。これ以後の慶派仏師の活動は実に目ざましいものがある。我々は従ってこれ以後の事蹟を慶派の鎌倉新様形成の第二期として観ることが適当であろう。

五　慶派初期の作風について

前述した様に、小論では康慶、運慶、快慶らの所謂る初期の慶派の足跡をたどったのであるが、作品の数も極く少く、又問題の多い時期であるが慶派の作風の展開について一応の概観を試みることにしよう。

先づこの中で最も早い時期のものは、長寛二年のころのものと考え

られる蓮華王院本堂の「運慶」の銘を持つ千手観音立像一軀である。（注参照）これは千躰千手観音中の一躰として作られたこと、あるいはそのころの運慶の年令（大体十五六才と考えられる）などの制約もあるが、そこには、所謂る藤原末期の和様のかなり形式的なものしか見られない。このことはまた安元年間の作である円成寺の大日如来像にも引継がれている。この大日如来像はその姿態に若々しく引き緊ったものを見せ、その製作態度はかって藤原の和様には見られない雰囲気を持つものではあるが、その彫刻の面構成は、後期の運慶の作品に見られる様な、抑揚のある自由な力強い刀法によるものではなく、その基調をなしているものは、やはり伝統的な起伏のなだらかな面の構成に終っている。こうした点からすれば、この像にも後の運慶様、あるいは鎌倉新様と言われるものは、手法的には未だ認められないと言える。

さてこの次に見られる運慶らの作品は、文治二年ごろに造られたものと思われる伊豆の願成就院の像である。現在同寺に残る二枚の運慶の造像銘札は毘沙門、不動の胎内から出たものと伝えられているが、ここに残る阿弥陀、不動三尊、毘沙門天も、同じ時期に作られたものの様である。阿弥陀像は寄木内刳、彫眼であり、螺髪は荒い彫り出しで、衣文はかなり隆起も高く、慶派の後の諸作品と通じる点を持っが、顔の彫り方に異色があり、殊にその眼は彫眼であると共に、その長さが短かく、目尻にかけて斜に吊り上っているところなどは、慶派の作として考えるにしても極めて異様である。それ故に今日迄この像は、あるいは関東仏師の作であろうかとも考えられて来たのであるが、それを考えるにあたっても、恐らく後の運慶の作品、東大寺南大門の金剛力士像、興福寺北円堂の諸像などに見られる様式が運慶の作品の基準としてその判断の基礎となっているのではなかろうか。だがこうした今日の運慶様と言う我々のイメージにある様式は、和様の伝統の中で育って来た運慶がいきなり伝統を否定し、一挙にしてそうした様式を確立することが果して可能なことかどうかを考慮することが必要であろう。恐らく青年仏師運慶は、和様の持つおだやかな雰囲気にとどまり得ぬ、大きな時代の欲求の何ものかを、ひそかに身の内に感じながら、かの安元二年の大日如来像を刻んだことであろう。然しそこではそうした鎌倉的な感覚を盛る新様への端緒を運慶は彫刻の面構成と言う点からすれば未だ見出していない様である。運慶にとって新しい様式への転機となったものは、恐らくは先づ第一に養和寿永年間に大仏の修理に関係したことであろう。天平のモニュメンタルな大仏の面の復旧を手がけた運慶らにとっては、天平の写実が彼等の求めた新様へ一つの手掛りとなったのであろうことは推察に難くない。私はそう言った意味でこの願成就院の像を、極めて荒い作りではあるが、とに角写実と言う新しい方向へ摸索を行っている運慶の過渡的な作品として考えることが出来るのではないかと思う。過渡的な作風とはこの場合、彼等の建久以後の作に見られる様な、内面に向って堀り下げられた写実ではなく、とに角従前の末期的な和様の伝統からすべてを絶縁して何か新しく仏像を彫り刻んで行こうとする、新しい写実への摸索の段階と言った極めて未整理な作風でもある。文治五年の銘札のあった浄楽寺の諸像では、こうした混乱はかなり整理されて来ている。衣文の彫りもかなり隆起抑揚を持つ様になり、本尊阿弥陀像の

顔もかなり引締ったものになろうとしている。更に現在興福寺に残る釈迦の仏頭も目とか鼻、耳などの彫り方に同じ傾向が見られるが、この興福寺の釈迦像は浄楽寺の阿弥陀より更に顔がひき締っており、様式としては、この過渡的なものが、かなり整理されて来ている点で、浄楽寺像の後に来るものと考えてよいだろう。

一方快慶の作として、現在醍醐三宝院にある弥勒菩薩の座像は、建久三年の八月から十一月にかけて造られたものであるが、この像に於ける衣紋の彫り方は前述した浄楽寺の阿弥陀像と軌を一にしたものがある。この像には後の快慶の作品の様な一般に云われる安阿弥様は未だ出ていないが、その面部には鋭い理智的な冷たさがただよい、特に耳には快慶独自の豊麗さが見られる。従って運慶と、快慶とがそれぞれの異った作風へと分岐する時期は、大体この文治末から建久初あたりのことと考えられるが、この共通の基盤に育った運慶と快慶が、後には何故に運慶様、快慶様と異った様式を見せるのであるかと言う事は極めて興味ある問題であるが、それに就いては、更に今後の研究を待つこととして、小論は慶派の初期の基礎的、準備的な研究をもって終ることとする。

（注）丸尾彰三郎氏の千躰千手観音像修理報告書では、この像を偽銘とされているが、像が比較的小造りであること、裳の下部に張りがなく、裳の腹部下の形式が建長再興の時の院賀の作と同様であること、又長寛仏には作銘が見られないこと、更に「運慶」の銘の運筆に粗雑さがあると言われる点などが、その否定説の根拠である様だが、この説についても未だ充分に納得の行かぬ点がある。第一には太造りが必ずしも長寛のものに限らず、湛慶などの作にも見られることからすれば、又逆のこともあり得る可能性もあり、この長寛のころには、たしかに円派、院派、慶派などの色々な仏師が作っているはずであり、先ずは長寛仏中でその区分をなすことが、丸尾氏の説では先決問題であろうかと思われる。銘記の書体については、このころの運慶の年令のことも充分考慮しなければならないはずであるから、問題は、この像を我々が観照した際に果してこの像が藤原時代も末の長寛二年（一一六四）ごろの感覚をもつものか、或いは、鎌倉も中期の建長三年（一二五一）から文和三年（一二六六）ごろの鎌倉新様の洗練を経たものかを、むしろ看て取ることであろうと思う。そう見るならば、この像の面の彫り方、特に上半身のそれは、やがては円成寺の大日如来像の作者として成長して行く、少年運慶の十代の作として、充分に首肯出来るものを持っている。特にその顔のつくりは、建長年間の院派の型にはまった様な形式的なところがなく、眉や目の所などに独自な鋭どさを持ち、また安元二年の円成寺の大日如来像とその相貌に共通するものがある点からすれば、たしかにこれは運慶の作として肯定しなければならない。

（完）

（本学講師―楽書講読）

〔附表〕

慶派関係年表

久納慶一編

西紀	年号	年	月	日	事項
一一五一	仁平	元年			運慶の生年はこのころか（源教授推定、仏教美術18号）
		元年			長岳寺阿弥陀三尊像（納入文書）

一一五四	久寿		
一一五六	保元		
一一五九	平治		
一一六〇	永暦		
一一六一	応保		
一一六四	長寛	二年	運慶蓮華王院本堂中の千手観音立像を造る（銘記）
一一六五	永万		
一一六六	仁安		
一一六九	嘉応		
一一七三	承安	三年	運慶の長子湛慶の出生（没年より逆算）
一一七六	安元	二年 十月十九日	運慶円成寺旧多宝塔本尊大日如来像を奉渡（銘記）
一一七七	治承	元年十二月十七日	康慶蓮華王院五重塔の造仏により法橋に叙せらる（玉葉）
一一八〇	治承	四年十二月廿八日	南都焼亡す
一一八一	養和	元年 六月十五日	興福寺造営のことを始む（玉葉、一代要記）
		元年 六月廿六日	東大寺の造寺官の任命（東大寺続要録）
		元年 八月	俊乗房重源東大寺勧進上人となる（東大寺続要録）
		元年 九月	興福寺講堂本尊を半作の食堂にて開眼（玉葉、三会定一記）
		元年 十月 六日	大仏の螺髪三流を鋳す（玉葉、続要録）
一一八二	寿永	元年 七月廿三日	陳和卿大仏前にて重源とその営を議す（続要録）
一一八三	寿永	二年 四月十九日より	五月十八日にかけて大仏の面の鋳成を完了す（続要録、玉葉）
		二年 四月 八日より	六月七日にかけて僧運慶願主となって法華経を書写す（同奥書）
		二年 十月以降	東大寺別当に東寺長者仁和寺別当定遍権僧正補任
一一八四	元暦	元年 六月廿三日	大仏の御身は悉く奉鋳了云々（玉葉）
		元年十二月廿二日	このころ興福寺西金堂の堂舎造営成る（流記）
一一八五	文治	元年 三月十九日	大仏の背を修鋳することに就き重源云々（玉葉）
		元年 六月廿八日	興福寺東金堂造営完了、堂仏造営の勧進を始める（玉葉）
		元年 八月廿八日	東大寺大仏開眼供養（導師定遍権僧正）
		元年 十月廿四日	元暦元年十一月より始った鎌倉勝長寿院の造営供養（仏師成朝）

	文治	元年十二月十八日	東寺第一長者定遍法務権僧正入滅（玉葉）
一一八六	文治	二年三月二日	南都大仏師成朝幕府へ言上す（吾妻鏡）
		二年五月三日	勾当運慶伊豆願成就院の像を始める（銘札）
	文治	二年七月廿七日	興福寺事始、法成寺事始（玉葉）
		二年八月三日	興福寺東金堂仏を法成寺中薬師堂にて造ろうとする（玉葉）
		二年十月十日	興福寺講堂二菩薩像（院尊作）を講堂に渡す（玉葉、三会定一記）
一一八七	文治	三年三月九日	興福寺東金堂衆山田寺薬師三尊像を奪取する（玉葉）
一一八八	文治	四年正月廿九日	興福寺金堂南円堂上棟（玉葉、百練抄、一代要記）
		四年五月五日	興福寺一乗院上棟　（大乗院日記目録、同雑事記）
		四年六月十八日	興福寺南円堂仏を康慶最勝金剛院で始める（玉葉）
一一八九	文治	五年二月十四日	最勝金剛院に御仏を奉居す（玉葉）
		五年三月廿日	大仏師相応院勾当運慶興福寺にて浄楽寺像を造る（銘札）
		五年八月八日	興福寺南円堂四天御衣木のこと云々（玉葉）
		五年八月廿三日	興福寺西金堂白木仏云々、一乗院仏所康慶、京都仏師云々（玉葉）
		五年九月廿八日	興福寺南円堂本尊を堂に渡す（玉葉）
		五年九月十五日	快慶夔親及び師権僧正のために弥勒菩薩像を造る（納入経巻）
一一九〇	建久	元年三月八日	快慶弥勒像中に書経を納入す（納入経巻）
		元年十月十九日	東大寺大仏殿上棟（東大寺要録）
一一九一		二年九月八日	興福寺南大門力士像につき康慶院実云々（玉葉）
一一九二		三年八月五日より	十一月二日にかけ快慶三宝院弥勒菩薩像を造る（銘記）
一一九三		四年三月九日	蓮華王院内堂に康慶作不動三尊像を安置する
一一九四		五年七月廿三日	興福寺金堂中尊を法成寺で始める（明円）（玉葉）
		五年九月廿二日	興福寺供養（中尊開眼）
		五年九月廿二日	興福寺金堂弥勒浄土像の造像で成朝法橋に叙せられる
		五年十二月廿六日	東大寺南中門二天像を造り始める（快慶、定覚）（続要録）
		六年三月十二日	東大寺供養、運慶法眼に叙せらる（続要録、壬生文書）
一一九五		七年三月廿二日	興福寺東金堂維摩居士像の御衣木加持を行う（銘記）
一一九六		七年六月十三日	九条御堂に東大寺四天像の雛型を見る（明月記）
		七年六月十八日	運慶ら東大寺脇士菩薩及四天像を造り始める（続要録、抄本要録）

	建久	七年 七月 五日	興福寺東金堂維摩居士像を供養す（定慶）（銘記）
		？	運慶神護寺中門二天を造る（神護寺略記、東宝記）
一一九七	建久	？	運慶鑁阿寺大日如来、仁王を造ると伝う（鑁阿寺縁起）
		八年 二月廿八日	東大寺鎮守八幡宮社殿改造の上棟（八幡験記、東大寺要録）
		八年 五月ごろ	運慶東寺講堂諸像の修理を始める（東宝記　東寺私用集）
		？	運慶　湛慶と共に東寺南大門仁王像を造る（東宝記）
		八年 五月廿八日	運慶高野山不動堂二童子及八大童子像を造ると伝う（春秋）
		八年 十月十二日	快慶円福院釈迦如来像を造る（銘記）
一一九九	正治	元年 六月	東大寺南大門上棟（東大寺要録）
		このころか	峰定寺釈迦如来立像
		このころか	遣仰院釈迦如来立像（多数の印仏、署名あり）
		このころか	遣仰院阿弥陀如来立像（快慶）（銘記）
一二〇〇	正治	二年十一月十一日	快慶作金剛峯寺孔雀明王像を供養す（銘記、高野春秋、他）
一二〇一	建仁	元年 十月	快慶伊豆山常行堂の仏像を造る
		元年十二月	定慶興福寺西金堂帝釈天像を造る（銘記）
		元年十二月廿七日	快慶東大寺鎮守八幡神像を造る（銘記）
一二〇二	建仁	二年 三月 十日	定慶興福寺西金堂梵天像を造る（銘記）
		二年 八月 廿日	興福寺西金堂脇侍薬王菩薩像（銘記）
		二年 九月 六日	興福寺西金堂脇侍薬上菩薩像（銘記）
		二年 十月ころか	快慶新大仏寺本尊像を造る
		二年 十月廿六日	運慶近衛基通の白檀普賢像を造る（猪隈関白記）
		？	快慶東大寺俊乗堂の阿弥陀如来像を造り始める（銘記、東大寺雑集）
一二〇三	建仁	三年　このころ	運慶神護寺講堂の仏像を造る（神護寺略記）
		三年 五月 四日	快慶三宝院不動明王像を造立する（銘記）
		三年 六月廿七日	元興寺福智院の地蔵丈六坐像が造立される（胎内銘）
		三年 七月廿四日より	十月三日にかけて運慶快慶東大寺南大門仁王像を造る（東大寺要録・別当次第）
		三年十一月 卅日	東大寺惣供養（諸天供養）
		このころか？	安倍文殊院文殊五尊像（「建仁……巧匠（アン）阿陀……」）（銘記）
一二〇四	元久	元年……以降承元年間	法橋快慶東大寺地蔵菩薩像を造る（銘記）
一二〇六	建永	元年 六月	重源上人没す

	建永	元年十一月	高弁（明恵）栂尾を賜り高山寺を建つ（高山寺縁起）
一二〇七	承元	元年 四月廿九日	興福寺東金堂十二神将像（銘記）
		元年 八月	興福寺北円堂の再興発願（弥勒感応抄）
一〇〇八	承元	二年 四月廿八日	法橋快慶石清水八幡宮に僧形八幡画像を寄進す（寄進銘）
		二年 九月一日	快慶作東大寺阿弥陀像の裁金を始める（銘記）
		二年十二月十七日	法印運慶興福寺北円堂諸像を造り始める（猪隈関白記）
一二一〇		四年 七月八日	快慶作熾盛光堂釈迦像を渡す（門葉記）
		四年十二月十一日以前	快慶白檀釈迦像を造る（明本抄）
一二一一	建暦	元年 三月廿八日	快慶東寿院阿弥陀像を造る
一二一二	建暦	二年春頃	興福寺北円堂中尊像に納入物を納む（願文）
		二年	浄瑠璃寺吉祥天像を堂に渡す（同寺流記）
二一一三	建保	元年 四月廿六日	運慶法勝寺九重塔造仏賞を満慶に譲る（明月記）
一二一五	建保	三年 四月廿六日	興福寺西金堂竜灯鬼像（法橋康弁）（銘記）
……	……	……	……
二一二二	貞応	二年十二月十一日	運慶没す（東寺諸堂縁起抄）